

# 学校現場における スクールソーシャルワーカーの 常駐化に向けて

- 1.教育相談コーディネーター調査
- 2.教員のタイムスタディ調査
- 3.スクリーニング二次分析

※「常駐」とは、学校から見て「常に学校にいること」、  
「緊急時に対応可能なこと」である。

研究代表者：山野則子

研究協力者：駒田安紀、橋本磨和、榎本久美子

スクールソーシャルワーク評価支援研究所

大阪公立大学 現代システム科学研究科 山野則子研究室

〒599-8531 堺市中区学園前1-1

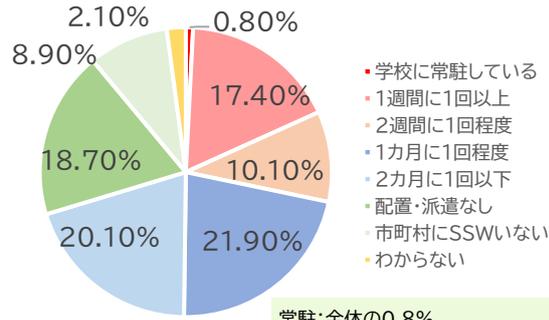
TEL 072-254-9783 (直通) ✉ [gr-kyik-ebssw@omu.ac.jp](mailto:gr-kyik-ebssw@omu.ac.jp)

HP <https://www.omu.ac.jp/orp/ries-ssw/>



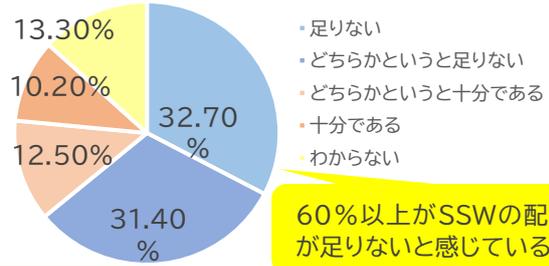
# 1. 教育相談コーディネーター調査分析結果概要 (N=4,927)

SSWの配置・派遣状況



常駐: 全体の0.8%  
週1などの回数は学校からみた回数(勤務形態ではない)

SSWの配置・派遣が十分と感じているかどうか

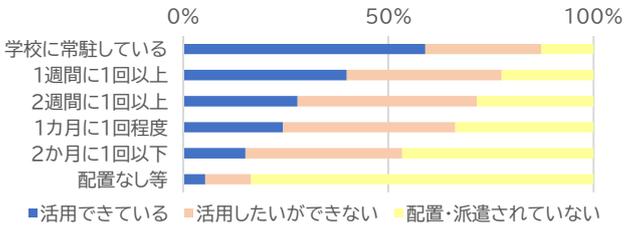


60%以上がSSWの配置・派遣が足りないと感じている！

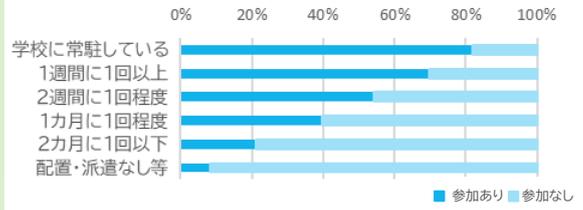
SSWの活用率が低い項目においてもSSWが常駐しているところは活用率が高い！

SSWが会議に出席するためには、配置・派遣回数の充実が必須！  
下記はチーム会議の例。

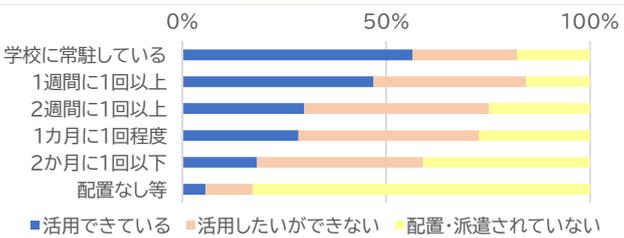
SSW配置・派遣状況と学校運営に関する会議の実施



SSW配置状況とチーム会議へのSSWの参加



SSW配置・派遣状況と学校と地域(民生委員や子ども食堂など)とのつながりづくりや交流



不登校好転率(小学校)



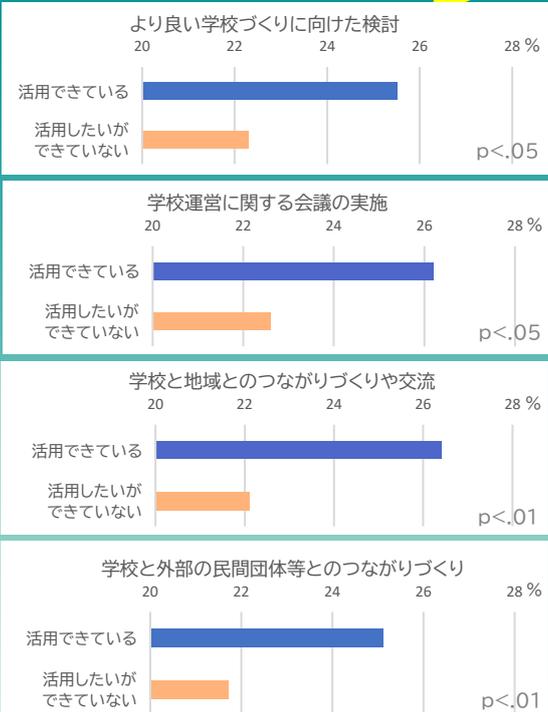
SSWが常駐している学校では不登校好転率が非常に高い！

不登校好転率(中学校)

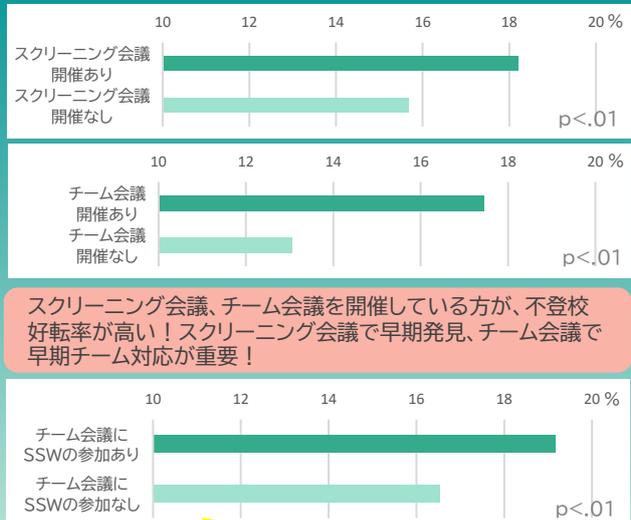


関係機関、地域の社会資源との連携や学校運営に関する会議においてSSWが活用されている学校では不登校好転率が高い！

不登校好転率(全学校種別)



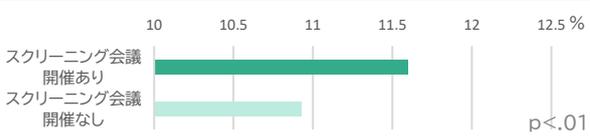
不登校好転率(小学校)



スクリーニング会議、チーム会議を開催している方が、不登校好転率が高い！スクリーニング会議で早期発見、チーム会議で早期チーム対応が重要！

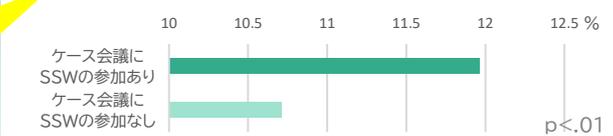
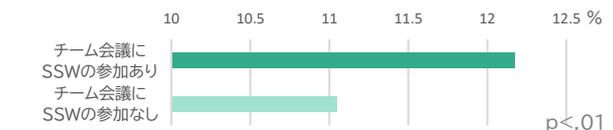
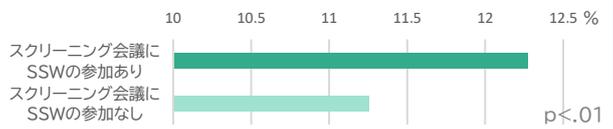
チーム会議にSSWが参加している方が、不登校好転率が高い！支援の方向性を決める場面にSSW参加が効果を発揮している。

## 就学援助利用率(小学校)



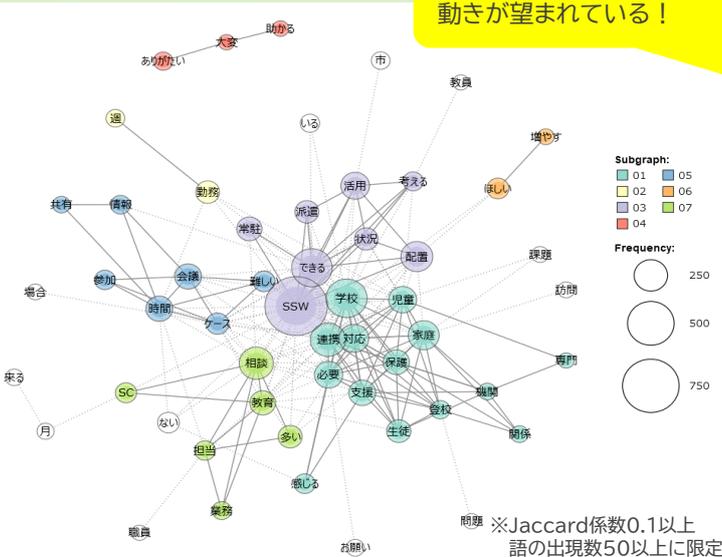
スクリーニング会議を開催している方が、就学援助利用率が高い！スクリーニング会議は、経済的支援が必要な家庭の発見を促進している！

3つの会議いずれかにsswが参加している方が就学援助利用率は高い！sswは経済面の評価という視点から発見機能を強化するとともに、具体的な支援方法を決定し家庭に必要な情報提供を行うことを可能にしている。



## 自由記述

今後、各校への常駐化に向けた動きが望まれている！



学校における教育相談業務やスクールソーシャルワーカーとの連携などについての自由記述の分析をおこなった(n=949)。同色で線で結ばれた語のグループを、原文を参照しながら解釈した。

▶「SSWの勤務頻度が少ない」と教育相談コーディネーターが認識している。

▶それにより、教育相談コーディネーターからSSWへの依頼や相談が困難になり、SSWの会議参加が少ない、必要な事例への対応が不十分という現状。

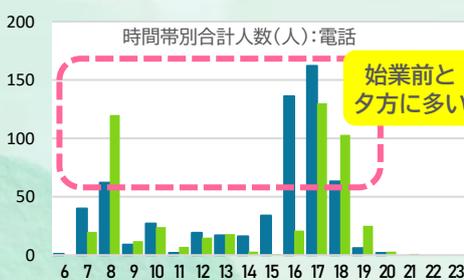
▶自治体に常駐をしているところであっても「学校に」常駐してほしいという声。

▶「常駐」という語が多く出現し、「常勤」は少ない。

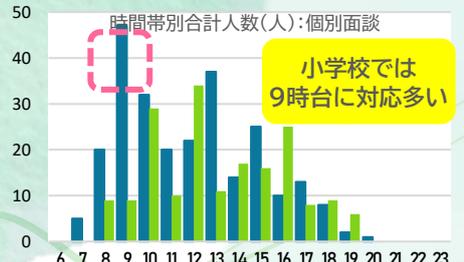
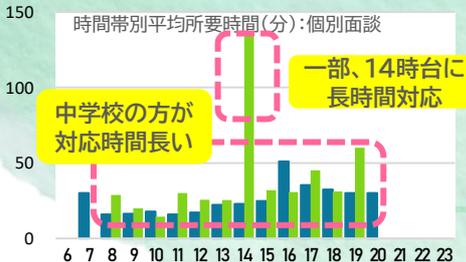
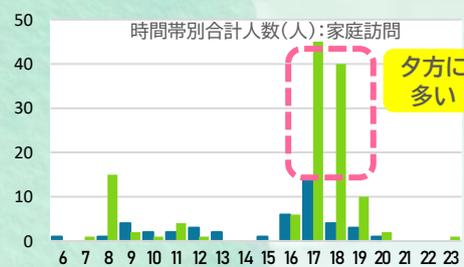
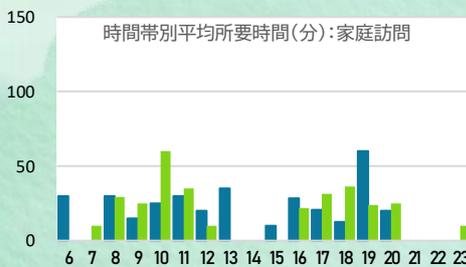
▶SSWが来校すれば相談できる、事例に対応してもらえる。

## 2. 小中学校教員のタイムスタディ調査概要

28日間、事例対応のために動いた時間を教員自ら記録。



1校あたりSSWが年間150時間以上(4~5時間×年間35回)勤務すると、そうでない場合に比べ、個別面談と関係機関との連絡の2項目について教員の負担が軽減(p<.05)。



■1校あたり年間SSW勤務150時間未満  
■1校あたり年間SSW勤務150時間以上

# 今回の調査で得られたスクリーニングに関する結果

## 3. スクリーニングデータ二次分析 ～スクリーニング新規導入校と継続校の比較～

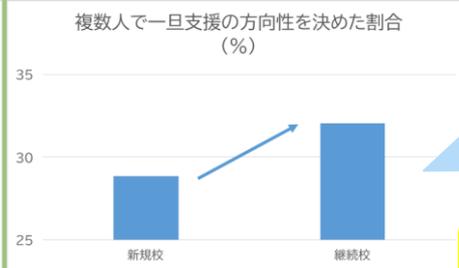
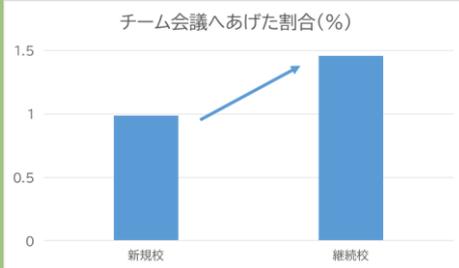
### <分析概要>

スクリーニングとしてYOSS※の新規導入校(1年未満)と継続校で以下の2つを比較

- 「チーム会議にあげた割合」
- 「複数人で一旦支援の方向性を決めた割合」

### <分析対象>

- ◆ 2023年度、スクリーニングを実施していた1自治体の公立小学校
- ◆ 新規導入校(28校・12,562人)と継続校(14校・4,731人)
- ◆ 分析には2023年度2学期のスクリーニングデータを使用

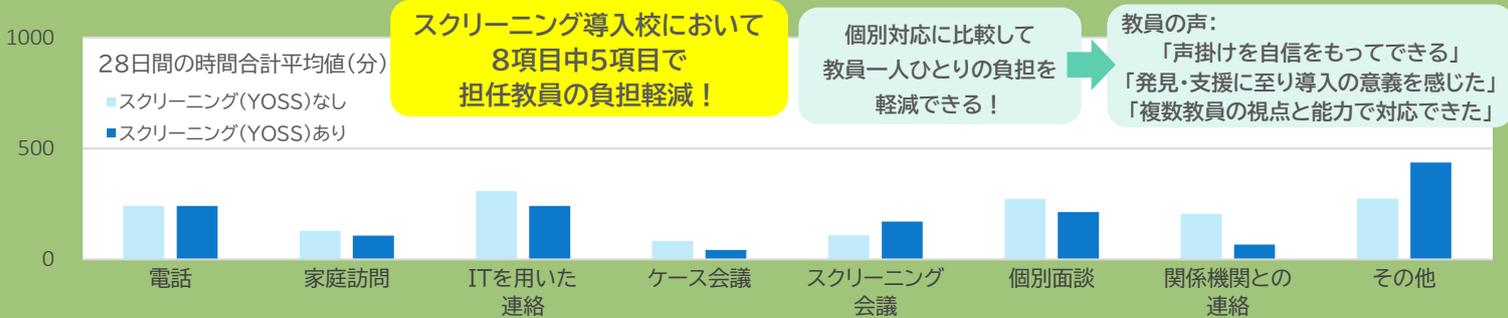


カイニ乗検定の結果、スクリーニング継続校のほうが、新規導入校に比べて・・・

- 「チーム会議にあげた割合」が有意に大きかった(p<0.05)。
- 「複数人で一旦支援の方向性を決めた割合」が有意に大きかった(p<0.05)。

スクリーニングを継続することで教職員の中に福祉的な視点が広がっていく

## 2. タイムスタディ調査より ～スクリーニング導入校と非導入校の比較～



※YOSS (Youngsters' Obstacles Screening System)とは「子どもの最善の利益のために、すべての子どもを対象として、問題の未然防止のために、データに基づいて、潜在的に支援の必要な子どもや家庭を適切な支援につなぐための迅速な識別」であり、つまり「1人で単に子どもの実態をチェックすることではなく、**チェックしたデータに基づき複数人による議論**から実行可能な暫定的な方向性を決定すること」(文部科学省「スクリーニング活用ガイド」)



## 本調査でみてきたSSWの効果的活用モデル

